



(萩)

山口・萩城跡（外堀地区）

はぎじょう

山口・萩城跡（外堀地区）

復するため堀を浚渫し、その土砂で外堀の東端を埋め石垣を築き、堀幅八間とした。埋め立て地には新たに町屋が成立し、「北片河町」、「南片河町」となった。

- 1 所在地 山口県萩市北片河町
- 2 調査期間 一九九七年（平9）五月～一九九八年一月
- 3 発掘機関 山口県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 谷口哲一・林 信行・井川隆司・吉野祥子
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

萩城は関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏によつて、防長移封後の慶長

一三年（一六〇八）に建設された。外堀は遅れて元和八年（一六二

二）に完成している。東側の外堀では当初堀幅二〇間であったが、その後町屋の進出や土砂の流入により一四間に狭まり、さらに堀底

の上昇により洪水の危険が生じ舟の通行にも支障を來したため、元文四年（一七三九）に藩は堀の機能を回

域において道路改修が計画され、その事前調査として萩市教育委員会がトレーン調査を実施してきたが、一九九七年度は山口県埋蔵文化財センターが、北片河町の一部（一四〇〇m²）を対象に発掘調査を実施した。その結果、堀幅八間の時期の町屋跡が確認された。主な検出遺構としては、石垣・石列・石段・排水溝・礎石建ち建物・埋甕・井戸・廃棄土坑がある。遺物は八万点以上あり現在整理中である。

木簡は一八世紀の廃棄土坑であるSK八〇から八点、SK九二から二一点、計二九点出土した。判読できる木簡は一五点あるが、今回はこのうちのSK八〇出土の二点について紹介する。木簡が出土したこれらの土坑からは、近世陶磁器とともに、約六〇〇点の木製品（建築部材・下駄・漆椀・櫛・箸・扇子・羽子板など）が破棄された状態で出土した。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「内山玄□様□□下」
- ・「味噌樽壺^一つ」

(2) 「庄ヤ八郎左衛門 三升」

後烟村市郎右衛門組

〔升〕

・「□□□四□□衛門在判」

193×37×5 051

(1)は三片に分かれるがほぼ完存している。上・下端に切り込みを入れ、表・裏面と両側面は丁寧な削り調整を施している。表裏面とも一部に判読できない部分がある。

(2)は完存。表・裏面、両側面とも削り調整をしている。裏面は一部剥離しているため文字が判読できない。

これらの木簡は、人名、地名、商品名や数量が記載されている」とから、荷札として使用されたと考えられる。

なお木簡の釈読は、元山口大学の八木充氏による。

9 関係文献

(財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター「掘る見るわかる 城下町—萩城跡(外堀地区)発掘調査報告I—」(一九九八年)

(谷口哲一)



(2)



(1)